

彫刻 **御宿 至**
今回の彫刻部門は、応募数 6 点ということで少し残念なことでしたが、入選とさせて頂いた 5 作品は、甲乙をつけがたく入賞を決めさせていただくのに大変迷いました。

三作品、村井さんの「可愛いブタさん」、高さんの「まんまる」、須藤さん「キミのこと知りたいな」は、身近に触れることが出来る動物をテーマに制作していて、それぞれの生き物に注ぐ眼差しの温かさが通底していて好感をもちました。高さんは、リスのフォルムを優しい曲線で表現し、須藤さんは、「犬」と「ぬいぐるみの犬」が対に配置されている作品でともに佳作と思いました。村井さんの作品は、モデルとした動物へのやさしさの目線を伴った観察力を評価し入賞としました。杉村さん、水野さんの作品も佳い作品と思いましたが、二作品の表現方法としては、もう少しメリハリがあったらと思いました。

しかし、私たちが“コロナ禍”のなかだからこそ、一生懸命創造し、その過程でもう一度自身の心の、そして自然の声に耳を傾けてみることは大変意義のあることかもしれません。
今回の作品楽しみにしております。

御宿 至の「可愛いブタさん」(2021年)

書 **広瀬 舟雲**
本展の全応募作品を拝見すると、いろいろな分野の作品が集まり、しかも技術力の高度な作品が多いということが第一印象であった。その中でも大賞の名倉さんの作品は、線の明るさが特にきらめき余白に詩情が満ちた力作。作品から溢れ出る若々しいすがすがしさが魅力的であった。土屋さんの作品は、長年鍛錬した連綿草の集大成とでもいうべき作で線が心地よく定着。大石さんの作品は動い細線を駆使し泰然と歩む仮名で行間の白が冴える。ほかに篆書の大字や行草の横作品に優秀なものが見られた。

総評として、にじんだ時の墨色に気配りしていただくによりよくなるものや畳字の書き方に意を払ってほしいと思う作品が見られた。また、正しい草書の字形を学んだ上で、デフォルメしてほしいと思った。技術があり、全体の構成がしっかりとされていていいと思っても近寄って細部を見ると筆先の動きや字形が今一步のものがいくつかあり、とてもおおいと感じた。書作品の制作は技術的な鍛錬だけでは深いものは生まれない。常に古典の字習を深めた上で新しいものを創造していただきたい。

御宿 至の「ぬいぐるみの犬」(2021年)

工芸 **御宿 至**
今回は、応募数 19 点で 11 点を入選としました。工芸部門の審査でいつも感じるのは、素材が多岐に渡ることからくる難しきです。この 11 作品からさらに、入賞作品 2 点を選出するのは大変でした。それ程、其々の作品の佳さが拮抗していました。入賞の二作品、齋藤さんの「Darwin Fish〜海洋プラスチックごみを食べる深海魚〜」と、小野田さんの「Whale Watching」は、創作の重要な要素の一つでもある素材に対する創意と工夫が感じられ、作者の息づかと情熱をより強く受け取りました。さらに世界の環境問題をテーマにユーモラスに表現した「Darwin Fish」を大賞としました。馬淵さんの「子牛とひつじ」は、秀作と思いましたが、作品の見せ方（展示の方法）にあとひと工夫欲しかったと思いました。鈴木さんの「池のほとり」は、優雅なフォルムと品のよい碧色が心に残りました。他に、石井さん、佐々木さん、横井さん、石野さんの作品も佳い作品と感じました。皆さんが“コロナ禍”のなか一生懸命制作されたことに敬意を払います。
今回の作品楽しみにしております。

御宿 至の「ぬいぐるみの犬」(2021年)

写真 **若木 信吾**
大賞に選ばれた竹内さんの「こうじょう」は工場という意味なのでしょうか。そのそっけないタイトルが背景をさりげなく際立たせていて、壁にかけられた工具など、画面のいろんな部分にも意味をもたせ、この人は誰、どうしてという興味がどンドン湧いてきました。そしてそれを凌駕するように、宙返りをする被写体の躍動感や手足の浮き出た筋肉の美しさがそこにありました。写真の特徴である、現実の瞬間を切り取るというだけのシンプルな行為だけで、生きている素晴らしさがストレートに表現されていたと思います。

「熟演」の生き生きとした集団の表情や「散歩仲間」がみせてくれる優しい気持ちと出会う瞬間、「怪鳥」の普段見せない自然の荒々しさに遭遇した驚き、「合唱の窓」の遠くから見てもひきつけられる家族の温かな表情など、今回入選された写真を見ると、コロナ禍の自己規制の生活が続く中、こういう瞬間に早くも懐かしさを感じてしまうほどでした。写真はとても手軽なメディアですが、こういう機微の変化がふと表面化した瞬間を掴む能力に長けていると思います。

市展の写真は撮影者の意図に関わらず「浜松」の特徴が写し出されています。それぞれの生活の中で大事にしていることや、当たり前すぎて忘れてしまっているようなことを改めて写真に撮ってみてはいかががでしょうか。

応募数及び入賞入選数

	(単位:点)					
部門 \ 作品数	絵画	彫刻	書	工芸	写真	計
応募数	199	6	23	19	68	315
入賞入選数	124	5	18	11	43	201

運営委員長 **瀧口 裕章**（浜松市美術館協議会会長）

審査員
絵画 **栗原 幸彦**（（日本画家）
彫刻・工芸 **御宿 至**（彫刻家）
書 **広瀬 舟雲**（武蔵野大学教育学部教授）
写真 **若木 信吾**（写真家）

御宿 至の「ぬいぐるみの犬」(2021年)

御宿 至の「ぬいぐるみの犬」(2021年)

ごあいさつ
運営委員長 瀧口 裕章
新型コロナウイルス感染拡大で首都圏並びに関西圏、愛知県岐阜卓等に緊急事態宣言が出される中、公私ともにご多用の中、感染に留意されながら浜松市美術館まで足をお運びいただきました皆様、ご来館誠にありがとうございます。

本年度（第68回）市展に応募されました16歳から89歳までの315名の皆様方それぞれの創作活動への熱い思いに対し敬意と感謝を申し上げます。

このようなコロナ禍で感性を磨かれ、外出自粛が言われる中で制作に没頭し、自分の思いを表現される努力は並大抵なことではないと思われます。

今回の応募作品につきましては、彫刻部門の応募が少ないなか、全体の点数は昨年よりも50数点増えスタッフ一同喜びに堪えません。

さて、作品の傾向を見ますと絵画・彫刻部門を中心に高校生と60歳以上の方の応募が多く、アートに挑戦する素直な心を感じたところでございました。

入賞・入選は全体で28点・201点であり、5部門からそれぞれ大賞を1点選び、その中から市長大賞を選んでいただきました。その結果、今年度は書部門の作品『色彩の呼応』（名倉栄梨さん作）が市長大賞に選ばれました。自作の言葉を文字の黒と余白でのびやかに表現されていると審査員から高評価を得ました。

東京オリンピックと同時に開催予定であった文化芸術活動も延期されて、飽くなき創作活動がコロナ克服へと繋げられ、市民が芸術に触れ、浜松市全体の文化活動向上に、今後もこの芸術祭が寄与しさらに発展することを願いごあいさつと致します。

御宿 至の「ぬいぐるみの犬」(2021年)

御宿 至の「ぬいぐるみの犬」(2021年)

御宿 至の「ぬいぐるみの犬」(2021年)

審査評
絵画 **栗原 幸彦**

この一年新型コロナウイルス禍で、今回の市展はかなり応募点数が減少するのではと心配していたのですが、思いの外応募点数が多く、選外作品をたくさん出さなくてはならなくなり、一生懸命描いていただいたのに申し訳なく思っています。具象作品、特に風景画で気になったのは多くの作品が写真を元にしていてわかってしまう事です。下手でも現場でスケッチもしくは本画を描いていればもっとリアルで臨場感のある絵に仕上がったはずです。今回は高校生の作品が多く見られましたが、まだ絵作りが未熟で気負いが先立っていて、もっと素直な作品作りから始められたほうが良いと思います。

絵画部門を全体的に見て、その他のジャンルに応募してくれた作品が高レベルだと思いました。

コロナがいつ終息するかわかりませんが、絵画は案の中で描く事ができます。次回もよい作品を応募してくれる事を期待しています。

令和2年度

浜松市

第68回

市展

開催期間 **令和3年2月2日(火)―2月12日(金)**

〔2月8日(月)休館〕

開館時間 **午前9時30分 ― 午後5時**

（ただし、最終日2月12日は午後3時まで）

会 場 **浜松市美術館**

主催：浜松市

